

地域文化に対する享受能力がコミュニティへの帰属意識に及ぼす影響 — 地域文化を活かしたまちづくりの有効性の検討 —

長積 仁¹ 佐藤充宏¹ 松永敬子² 榎本 悟³

The influence of acceptance capacity of the local culture on the community identification

— Examination of effectiveness of the community development which utilized the local culture —

Hitoshi Nagazumi¹, Mitsuhiro Sato¹, Keiko Matsunaga², Satoru Enomoto³

Abstract

It becomes a problem that the progress of the technology makes the personalization the behavior of human beings in the leisure society, and disturbs a lot of chances of the social capital formation. In order to clarify that encouraging leisure, recreation and culture in community contribute to community development, the purpose of this study is to examine what influence the acceptance capacity of the local culture brings to the community identification. In this study, it focused on the Awa Odori dance of the folk art which is a famous on a nationwide scale local performing art, and it implemented a questionnaire survey to local residents more than high school student and 219 effective samples were acquired. The major findings are summarized as follows: (1) It was clarified that affiliation of the social group related to Awa Odori dance improved the acceptance capacity on the local performing art, and the action and the consciousness were projected to the general acceptance capacity on the local culture. (2) It was clarified that the acceptance capacity of the local performing art influence the general acceptance capacity on the local culture, and its relation influence the community identification strongly.

1. 背景

急激な経済発展とマスメディアの普及をベースにした社会構造の変化は、地域住民のライフスタイルに大きな変化をもたらした。それは、機能集団が増大する一方で、近隣住民間の関係の希薄化に留まらず、「職・遊・学・憩」といった生活における複合空間としての地域社会の機能を著しく低下させてしまった。本来、地域とはある一定の

境界内で、そこに住む人々が互いに関係を持ちながら、生活を営む場所である。つまり地域とは、その地に住む人々が調整・連携・融合を図りながら、生活を織りなすための場であり、生活という営みを行う人々によって形成された集合体、また集団とも考えることができる。

これまで地域社会やコミュニティをどの様に捉えるかについては、地域社会を社会集団の類型と

1 徳島大学 The University of Tokushima

2 大阪体育大学 Osaka University of Health and Sport Sciences

3 岡山大学 Okayama University

して捉え、地縁・血縁・愛情といった人間的な絆をもとに結合した「ゲマインシャフト(共同社会)」と、多様な利害関係に基づき結合した「ゲゼルシャフト(利益社会)」から論じたテンニース²⁴⁾や、「地域性(locality)」と「コミュニティ感情(community sentiment)」という2つの特性によってコミュニティを特徴づけたマッキーバー⁹⁾といった社会学者によって語られてきた。特にマッキーバーのコミュニティ論では、衣食住をはじめとした、まさに生活に関する共通の関心事によって結びつく包括的な共同体のコミュニティの中に、学校や企業、また市民活動を行うNPOや地域クラブといった目的的かつ特殊な関心事によって結びついた人為的な組織であるアソシエーションが分化し、コミュニティ内におけるそれらのアソシエーションが発達することによって、さらにコミュニティの共同生活がより豊かになるということが述べられている。菊池⁸⁾によれば、アソシエーションには、クラブや市民運動団体のような住民がボランティアに結成した「自発的アソシエーション」と、学校、企業、教会、役所といった「専門的アソシエーション」の2種類があり、さらに複数の目的を持って活動したり、全戸加入を目的としたりするような町内会や自治会もアソシエーションの一種ではあるものの、自発的とも専門的ともいえず、2種類のアソシエーションには属さない独特の存在であるという。その意味で町内会や自治体は、ある種、コミュニティそのものにも似た「地縁的アソシエーション」とも呼ぶべき存在で、この地縁的組織を中心に様々な自発的組織や専門的組織が結合するというのが、組織面から見た我が国のコミュニティのイメージであるという興味深い指摘をしている。

かかる意味において、「コミュニティ」とはまさに地域性と共同性、さらには包括性を兼ね備えた社会のことを意味するものであり、ある一定の境界内において生活する人々の間に何らかの共同の営みや絆、またその繋がりが存在する、またはそれが存在しうる地域のことをコミュニティと見なすべきである。コミュニティという言葉は、行政担当者が行政区や自治体の範囲を示したり、まちづくりを進めるための美辞麗句としてではなく、その地域で生活を営む住民や自治会活動を行

う人々が自らの活動範囲や生活圏域の境界を示す現実的かつ実践的な概念として用いられるべきである。すなわち、コミュニティを考える際には、その物理的なエリアに目を向けるのではなく、人々の生活やそれに付随する様々な活動をセットして捉えるべきであり、住民が住み心地や生活のしやすさといったある種の快適性を求め、その地域とかかわり、様々な活動を行うというダイナミックな様相が期待できる範囲として捉えるべきであろう。そうすれば、我々の生活圏内に存在する地縁という絆を「しがらみ」としてではなく、共通する目標や互いに克服すべき課題を共有し合い、共に成長と発展を遂げ合う関係構築を図る「場」として認識できるのではないかと。

Coleman³⁾は、人々が持つ技能や知識に加え、互いに提携し、協力し合うという能力は、企業のような経済活動だけでなく、社会的生活のあらゆる面において重要であるという主張を「ソーシャル・キャピタル」として理論づけている。またColemanと同様に、ソーシャル・キャピタル研究の第一人者であるパットナム¹⁶⁾は、市民の積極的な参加と社会的つながりが、よりよい学校教育、急速な経済発展、より低い犯罪率、より効果的な政府といった様々な効果を生み出すと述べている。つまり、様々な理由からソーシャル・キャピタルを十分に蓄積しているコミュニティでは、生活がより心地よいものとなり、互酬性の強い規範を促進し、社会的信頼の出現を助長するため、「私」という意識から「我々」という意識へとコミュニティに対する自我意識を拡張させる効果があることを示唆している。その一方でパットナムは、米国のボウリング愛好家人口の増加とは裏腹に、クラブの加入者やリーグ戦参加者が激減したことによる社会経済的ダメージがソーシャル・キャピタルの衰退に関連していることを、著書のタイトルでもある「ひとりでボウリングをする(Bowling Alone)」の中で主張している。アメリカ社会において民主主義を機能させる源泉であったソーシャル・キャピタルが減少したのは、世代による変化、テレビをはじめとした電子メディアによる娯楽の私化、共稼ぎなどによる時間的・金銭的余裕の喪失と地域活動への不参加、そして住居が郊外へと広がることにともなう通勤時間の増大

といった4つに原因があるとした。特に技術の進展が余暇社会における人間の行動を「個人化」あるいは「私人化」させたことにより、ソーシャル・キャピタル形成の多くの機会を妨げていることを問題視するものといえるだろう。それでは、地域におけるレジャー・レクリエーションや文化の普及・振興が人々の生活をより豊かにするとともに、副次的産物として地域振興やコミュニティの再生に寄与するということを証明できないものだろうか？

我が国における様々な地域には、青森のねぶた祭り、郡上八幡の郡上おどり、岸和田のだんじり祭り、京都の祇園祭、徳島の阿波踊り、また博多の祇園山笠など、そのルーツや形態、また規模や継承は各々によって異なるものの、それぞれの地域を代表する祭りや郷土芸能が日本国内に数多く存在する。このような地域古来の祭りや郷土芸能といった文化は、その地域に住む人々にとって身近なものであり、その地域のことを住民に意識させるだけでなく、観光産業や地域経済の活性化にも強い影響力を持つ、いわば対内的・対外的にも地域を象徴するツールとなり得るものである。例えば、徳島に訪れる観光客が阿波踊りの囃子に引き寄せられて、見知らぬもの同士が「にわか連」という群衆や集団を形成し、踊りに興じる姿や県内外の人々が交流する姿は、まさにレジャー・レクリエーションの活動がもたらす効用といえるだろう。また一村一品運動が全国的に有名になった大分県では、その文化版ともいえる一村一文化運動が展開されているが、これはその地域にしかない文化を発掘し、国際的にも通用する文化を創造することにより、地域住民が豊かさを実感できる地域社会づくりの実現に向けた取り組みといえる。岡本¹²⁾は、このような運動が人々の地域アイデンティティの確立や地域に誇りを持って暮らせる豊かな地域の創出に結びつくとして述べており、地域文化を活かす最大のメリットは、住民に地域に対する愛着心を抱かせ、誇りを持たせることが可能になることを示唆している。ただ、地域における祭りや郷土芸能のような文化は、ただ単に存在するだけではそれぞれの固有価値や本質的価値を発揮することができず、その価値が地域住民に受け入れられ、正しく理解されることによって初

めて成り立つものである。

ラスキン¹⁷⁾は、ものの持つ固有価値が有効なもの (effectual) となるためには、それを受け取る側に一定の状態が必要であると述べている。つまり、有効価値を産み出すためには「固有価値」とそれを使用する能力、つまり「享受 (受容) 能力」の2つは欠かせず、どちらか一方でも欠けた場合には有効価値も富 (wealth) も存在しないと述べている。また池上⁶⁾は、固有価値を持つものとして、伝統産業や独自の景観、文化財といったその地域にしかないかけがえのないものを例にあげ、それらの多くは、時代を超えて受け継がれており、多くの人々が芸術文化的な価値を認めるものであると指摘している。それは、文化への享受能力の向上が文化そのものの価値を知ることになると同時に、その文化を生んだ地域に対する理解を深めたり、地域を再認識したりする機会になることを示すものといえるだろう。さらに池上⁷⁾は、地域の固有性や地域文化を活かした政策の展開の必要性についても論じており、これらの示唆により、地域と文化の密接なかかわりを持たせることと、それに対する理解を深めることが、地域に対する価値意識を向上させ、結果的にコミュニティに対する帰属意識を高めることにも繋がると推察できる。そこで本研究では、地域文化に対する享受能力がコミュニティへの帰属意識にどのような影響をもたらすかについて探求することと、得られた研究結果より地域文化を活かしたまちづくりの有効性とコミュニティの再生について検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 分析枠組み

本研究では、地域文化に対する享受能力がコミュニティへの帰属意識に及ぼす影響を探求するために、図1に示すような分析枠組みを設定した。地域社会への関心や無関心、またコミュニティ意識に関する研究はこれまでいくつか行われてきている。鈴木²¹⁾は、コミュニティ意識をコミュニティ・モラルとコミュニティ・ノルムの2つの視点から捉えている。特にコミュニティ・モラルについては、人々のコミュニティに対する同一化の程度を示す概念であり、望ましいコミュニテ

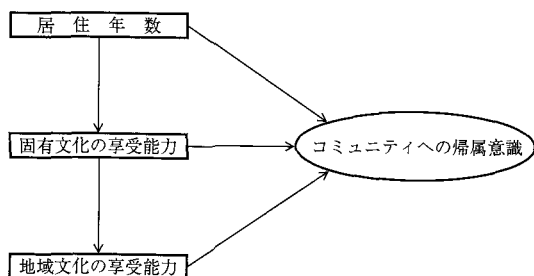


図1 分析枠組み

イの状態を維持し、創出しようとする人々の態度から把握されるものであると述べている。奥田¹³⁾によれば、地域優先主義に陥らず、主体的に地域の問題を解決していくということをコミュニティ意識と呼んでいる。また奥田¹⁴⁾は、地域性と普遍性の2軸によってコミュニティ・モデルを構成し、地域共同体とコミュニティを明確に区別し、コミュニティは地域の人々にとって「開かれたもの・つくられるもの」とし、そこから抱かれる地域へのアイデンティティも素朴な郷土愛感情とは隔たりがあるものとして、住民の主体的かつ能動的なかわりを重視している。さらに前述したように、マッキーバー⁹⁾は、「地域性」と「コミュニティ感情」によってコミュニティを特徴づけているが、特に後者については、「われわれ意識(共属感情)」「役割感情」「依存感情(コミュニティへの物的・心理的依存感情)」の3つに要約されている。そこで本研究は、奥田が示す地域への主体的なかわりと、マッキーバーのコミュニティ感情を構成する3つの要素をもとに、コミュニティに対する自己の意識や行動の内在化と同化についての心的状態を探ろうと試みた。

地域文化に対する享受能力に関しては、祭りや郷土芸能といった地域文化を全般的なものとして捉え、その享受能力に影響を及ぼすのが在住地域における固有の文化に対する享受能力であると考えた。つまり、青森のねぶた祭りや徳島の阿波踊りといった在住する地域における固有の祭りや郷土芸能に対する享受能力が地域文化の全般的な享受能力に結びつくと考えた。先にも述べたように、文化とは一種の固有価値であり、その固有価値を理解し高めていくこと、つまり享受することのできる人が存在しなければ、たとえ素晴らしい文化

が存在していたとしてもその価値は全く意味のないものになってしまう。したがって本研究では、固有価値と享受能力が高められたときに財が有効価値を発揮するというラスキン¹⁷⁾と、それと同様のスタンスをとり、「固有価値の継承と生産、享受能力の発達」とした池上⁶⁾の主張に基づき、享受能力を「固有価値の理解と継承」として捉えることにした。その際、「能力」については、獲得された知識や技術の有無や程度といった狭義の解釈ではなく、物事をなしえる力として能力を広義に解釈することにした。したがって、固有価値を理解する能力については、文化の価値と魅力に対する理解と探求心として捉え、また固有価値を継承する能力については、文化の継承に対する信念と意図として捉えた。それは予備調査において、阿波踊りの熟練者ほど、知識や技術の有無または程度の自己評価をする際に「謙遜の念」が生じるため、本音が引き出しにくいことが明らかになったためである。地域固有の文化に対する享受能力は、その文化にふれる絶対的な時間に関係するものと考え、居住年数を説明変数に加えた。そしてそれぞれ設定した居住年数、地域固有の文化享受能力、地域文化全般の享受能力はコミュニティへの帰属意識に対して、直接的な影響力も及ぼすという因果関係モデルを設定した。ただ文化享受能力は、社会集団への所属に影響を受けるものと考え、この因果モデルを証明するために社会集団への所属の有無による比較検討も行うことにした。なぜならば、地域の祭りや郷土芸能といった文化の享受能力は、文化への関与、つまり演じる、鑑賞・観賞するという人間の行為に関係するものと推察でき、社会集団への所属の有無とその所属集団の特性から影響を受けるものと考えられるためである。社会集団への所属については、パットナム¹⁵⁾によれば、近隣集団、合唱団、協同組合、スポーツクラブ、大衆政党などのような市民的積極参加のネットワークは、互酬性の強靱な規範とコミュニケーションを促進し、このネットワークが密になればなるほど、市民は相互利益に向けて協力できるようになると述べている。また Bowles and Gintis¹⁾は、「直接、頻繁に、かつ多面的に相互作用する人々のグループ」がコミュニティのガバナンスにおいて重要な役割を果たすこと

を示し、コミュニティを定義する特性は、結びつき（connection）であると述べている。前述したマッキーバーが言及したアソシエーションとコミュニティとの関係を合わせて考えれば、一般的に複数の行為者間の相互行為や相互関係に規則性と持続性が見られる社会集団は、コミュニティの帰属意識に影響を及ぼすものと考えられる。

（2）データ収集

本研究では、鍵を握る地域文化として約400年もの歴史を誇り、日本三大盆踊りの1つにも数えられる全国的にも有名な郷土芸能の阿波踊りに焦点を当てた。阿波踊りの起源については、中村¹¹⁾によれば、精霊踊り説、築城落成説、収穫感謝説、風流踊り説、黒潮伝播説、ええじゃないか説といった6つの説が唱えられているが、阿波踊りがいつ頃、どのようにして踊られるようになったのかということは定かではない。阿波踊りという名称が一般に広く使われるようになったのは、戦後のことで、昭和23年までの徳島新聞で取り上げられた記事では、阿波踊りという名称での記述はなく、昭和24年の徳島新聞の記事に「盆踊り」ではなく、「阿波踊り」に統一され、記述されたことを機に、一般市民に阿波踊りという名称が浸透し始めたと考えられている¹⁰⁾。現在、阿波踊りは8月12日から8月15日までのお盆期間中に観光事業の一環として開催され、徳島市観光協会に設置される阿波踊り実行委員会の調べによれば、踊り子と見物人を合わせて4日間で毎年100万人以上の人出によって徳島市内中心部を熱狂の渦に巻き込む祭りとなっている。

阿波踊りの社会的・文化的側面に関する研究²²⁾では、「連」と呼ばれる阿波踊りの演舞を行う社会集団の特質を明らかにし、有名連、企業連、学生連という様々な種類や形態の連が存在することを指摘している。中でも有名連とは、技術的に優れた同好の人々で形成された集団であり、中には招待され、演舞・公演をするような連も存在し、いわば阿波踊りのセミプロ集団ともいえる。ただ、多くの有名連は、多種多様な社会的属性を持つメンバーから構成されており、年齢制限がなく、自由に加入することができる開放性の高い集団といえる。有名連は任意団体であり、現在、徳島県阿

波踊り協会、阿波おどり振興協会、徳島県阿波おどり保存協会に登録されている有名連は44団体である。本研究では、阿波踊りという地域文化の特性を反映するため、先の3つの協会に所属する有名連の中から調査の承諾を得た3団体を対象に、質問紙調査を実施した。同時に社会集団の影響を探るために、阿波踊りの連に所属して活動していない徳島県民にも質問紙調査を実施した。阿波踊りは、徳島市内の多くの小学校の運動会の行事として行われるほど、子どもから大人や年配者に至るまで親しまれる伝統芸能であり、郷土文化である。ただ、阿波踊りの踊りそのものに興じる人々は、通常、連に所属するか、また阿波踊りの期間中、演舞場の付近で即興的に形成される「にわか連」に混じって踊る以外は、多くの人々にとって阿波踊りは、「踊る」というよりも「みる」または「雰囲気を楽しむ」という祭りの対象物になっている。このような状況を加味し、本研究では、連に所属していない人を、便宜的に「無所属」というグループとして捉えることにした。調査は高校生以上の男女に依頼し、調査方法は集合法及び託送法を用いた。調査期間は2004年11月から12月までで、その結果、有効標本数は、阿波踊りの有名連に所属する回答者が95名、阿波踊りの連に所属しない回答者が124名で、合計219名を分析の対象とした。

3. 結果

表1は、回答者の属性を社会集団への所属の有無、つまり連所属と無所属とに分けて結果を示したものである。性別に関しては、両者ともに女性が約6割と男性の値を上回っていた。年齢階層については、20歳代の占める割合が最も高く、連所属の群で34.7%、無所属の群で41.9%を示した。平均年齢は、連所属が33.28歳で無所属も33.26歳とほぼ同じ値を示し、両者ともに最少年齢は16歳、最高年齢は59歳であった。職業については、フルタイム勤務が無所属の群では32.8%であるのに対し、連所属の群では52.7%と全体の半数以上の値を示した。また学生の占める割合については、連所属が1割にも満たなかったのに対して、無所属では2割以上の値を示した。出身地に関しては、無所属群の8割以上、また連

表1 回答者の属性

	連所属 (n=95)	無所属 (n=124)	全 体 (n=219)	統計値
性別：男性	40.0	40.3	40.2	$\chi^2 = .00$ d.f.=1, n.s.
女性	60.0	59.7	59.8	
	100.0%	100.0%	100.0%	
年齢階層：20歳未満	5.3	5.6	5.5	$\chi^2 = 6.79$ d.f. = 4, n.s.
20～29歳	34.7	41.9	38.8	
30～39歳	30.5	21.0	25.1	
40～49歳	24.2	18.5	21.0	
50歳以上	5.3	12.9	9.6	
	100.0%	100.0%	100.0%	
平均年齢：	33.28歳	33.26歳	33.27歳	t-value=.02
職業：フルタイム勤務	52.7	32.8	41.4	$\chi^2 = 11.77$ d.f.=5, p<.05
パート・アルバイト	10.8	15.6	13.5	
自 営 業	3.2	4.9	4.2	
専 業 主 婦	5.4	4.9	5.1	
学 生	8.6	21.3	15.8	
そ の 他	19.4	20.5	20.0	
	100.0%	100.0%	100.0%	
出身地：徳島県内	89.4	82.3	85.3	$\chi^2 = 2.15$ d.f.=1, n.s.
徳島県外	10.6	17.7	14.7	
	100.0%	100.0%	100.0%	
居住年数：～5年	18.9	29.0	24.7	$\chi^2 = 4.06$ d.f.=5, n.s.
6～10年	22.1	20.2	21.0	
11～15年	11.6	8.9	10.0	
16～20年	12.6	9.7	11.0	
21～25年	13.7	16.1	15.1	
26年以上	21.1	16.1	18.3	
	100.0%	100.0%	100.0%	
平均居住年数：	16.44年	14.81年	15.52年	t-value=.96

表2 阿波踊りの享受能力

	連所属(n=95) Mean (SD)	無所属(n=124) Mean (SD)	全 体(n=219) Mean (SD)	t-value
阿波踊りの踊り方や魅力などを、県外の人々に説明することができる	4.16 (± .89)	2.85 (±1.14)	3.42 (±1.22)	9.20 ***
阿波踊りは、踊ったり鳴り物を演じたりしてこそ、その真価が発揮される	4.22 (± .87)	3.18 (±1.12)	3.63 (±1.14)	7.78 ***
できる限り阿波踊りを踊ったりみたりし、伝統芸能や文化の持つ価値や魅力を学びたい	4.13 (± .98)	2.72 (±1.03)	3.33 (±1.22)	10.27 ***
徳島県民として阿波踊りを守っていかねばならないという使命感がある	3.92 (±1.05)	2.76 (±1.00)	3.26 (±1.17)	8.32 ***
阿波踊りの原型や基本的な型は、しっかりと受け継ぎ、後々まで伝えていくべきだ	4.28 (± .83)	3.68 (±1.09)	3.94 (±1.03)	4.68 ***
阿波踊りという文化を伝承することに積極的に携わりたい	4.12 (± .97)	2.56 (± .97)	3.23 (±1.24)	11.79 ***

※「1. 全くあてはまらない」から「5. ひじょうによくあてはまる」までの5段階評定尺度が間隔尺度を構成すると仮定し、それぞれの番号をそのまま得点化して平均値を算出した。

* p<.05 ** p <.01 *** p <.001

表3 地域文化の享受能力

	連所属(n=95) Mean (SD)	無所属(n=124) Mean (SD)	全 体(n=219) Mean (SD)	t-value
地域文化にできる限りふれることによって、その価値や魅力を学びたい	3.58 (± .91)	2.90 (± .86)	3.20 (± .94)	5.59 ***
文化や芸術などは、自分の生活にうるおいを与えてくれるものだ	3.66 (± .93)	3.47 (± .90)	3.55 (± .91)	1.57
地域文化は、その地域やまちの顔といっても過言ではない	3.59 (± .93)	3.33 (± .96)	3.44 (± .95)	2.01 *
昔ながらの言い伝えや伝統は重んじる方だ	3.42 (± .88)	3.06 (± .99)	3.22 (± .96)	2.78 **
地域の文化や伝統芸能の継承はある特定の熱心な人たちに任せておけばよい	2.58 (± .77)	2.71 (± .79)	2.65 (± .78)	-1.23
地域文化を守り、伝えていくことに自分自身、積極的に携わりたい	3.27 (± .89)	2.53 (± .79)	2.85 (± .91)	6.50 ***

※「1. 全くあてはまらない」から「5. ひじょうによくあてはまる」までの5段階評定尺度が間隔尺度を構成すると仮定し、それぞれの番号をそのまま得点化して平均値を算出した。

* p<.05 ** p <.01 *** p <.001

所属群の約9割が徳島県内であった。平均居住年数は、無所属が14.81年であるのに対し、連所属が16.44歳と若干長い傾向にあった。

表2には、徳島県の固有文化である阿波踊りの享受能力に関する結果が、また表3には、祭りや郷土芸能といった地域文化全般の享受能力に関する結果が示されている。地域固有の文化として取り上げた阿波踊りの享受能力、また地域文化全般の享受能力については、先にも述べたように文化の価値と魅力に対する理解と探求心、そして文化の継承に対する信念と意図として捉え、それぞれ6項目を設定した。各々の項目に対して「1. 全くあてはまらない」から「5. ひじょうによくあてはまる」までの5段階評定尺度を用いて回答を求めた。そしてその尺度が間隔尺度を構成するものと仮定し、それぞれの尺度の番号をそのまま得点化して平均値を算出した。

阿波踊りの享受能力に関しては、地域固有の文化であり、回答者全体の得点が高得点に偏る天井効果 (ceiling effect) を示す可能性があるため、サンプル全体の平均値と標準偏差を検討したところ、6項目全てにおいて天井効果が確認されなかったため、それらの項目をそのまま用いて連所属と無所属の平均値の比較と差の検定を行った。その結果、予測される結果ではあったが、6項目全てにおいて連所属の平均値が無所属の平均値を顕著に上回り、0.1%水準で有意な差が確認された。連所属の平均値は「徳島県民として阿波踊りを守っていかねばならないという使命感がある」という項目以外、全てにおいて4ポイントを上回り、逆に無所属は、「阿波踊りの原型や基本的な型は、しっかりと受け継ぎ、後々まで伝えていくべきだ」と「阿波踊りは、踊ったり鳴り物を演じたりしてこそ、その真価が発揮される」という2項目を除いた4項目の平均値は、全て3ポイントを上回らなかった。ただ、「阿波踊りの原型や基本的な型は、しっかりと受け継ぎ、後々まで伝えていくべきだ」という項目に関しては、両群の平均値がともに6項目中最も高く、阿波踊りが徳島という地域にとって大切な郷土芸能であるという認識が抱かれていることが推測できる。これは、近年、演舞の派手なショー化や踊りの原形をとどめない亜流ともいえるような演舞に対する県民の

嘆きが一部マスコミに取り上げられており、そのような声を多少なりとも反映するような結果が得られたといえる。両者の平均値の差異が特に顕著であったのは、「阿波踊りという文化を伝承することに積極的に携わりたい」と「できる限り阿波踊りを踊ったり見たりし、郷土芸能や文化の持つ価値や魅力を学びたい」という項目で、その結果に示されるように、実際、祭りの期間中だけでなく、演舞や演奏で阿波踊りに携わっている連所属の方が阿波踊りという文化への関与、またその文化的価値への理解を示していることが理解できる。

地域文化に対する享受能力については、設定した尺度のまま平均値を算出した逆転項目（「地域の文化や郷土芸能の継承は、ある特定の熱心な人たちに任せておけばよい」）の1つを除いた全ての項目において、連所属の平均値が無所属の平均値を上回った。また6項目の内、4項目において連所属と無所属の平均値に有意な差が確認された。特に顕著であったのは、「地域文化を守り、伝えていくことに自分自身、積極的に携わりたい」と「地域文化にできる限りふれることによって、その価値や魅力を学びたい」という項目で、阿波踊りの享受能力と同様に、無所属よりも連所属の回答者が地域文化への関与、理解、保存・継承という意識が高いことがわかった。

表4は、コミュニティへの帰属意識に関する項目の因子分析の結果を示したものである。設定した17項目それぞれに対して、「1. 全くあてはまらない」から「5. ひじょうによくあてはまる」までの5段階評定尺度を用いて回答を求めた。そしてその尺度が間隔尺度を構成するものと仮定して、それぞれの尺度の番号をそのまま得点化し、平均値の算出ならびに主因子法による因子分析を行った。固有値1.0以上の数値を基準とし、4因子を採用した。4因子の累積寄与率は56.58%で、バリマックス回転後の各項目の因子負荷量と各因子の α 係数は表4に記されるとおりである。各因子を構成する項目間の信頼係数 α は、全て80以上を示し、4因子それぞれの安定度は証明された。そして各因子の項目の特徴から、人間関係を大切に、地域住民と助け合えるような関係が構築されており、地域住民を信頼してその地域に愛着を

表4 コミュニティへの帰属意識

	Mean(SD)	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子：共属感情 ($\alpha=.84$)						
いま住む地域での人間関係を大切にしている	3.01 (± 1.03)	.74	-.19	.11	.11	.56
いま住む地域の住民とは、困ったときに互いに助け合えるような関係が築けている	2.66 (± .95)	.71	-.22	.07	-.00	.52
いま住んでいる地域の住民であることに誇りを感じている	2.71 (± .91)	.62	-.10	.22	.15	.50
いま住んでいる地域の住民のことを信頼している	2.95 (± .90)	.60	-.06	.40	.04	.46
いま住んでいる地域に対して愛着を感じている	3.17 (± .98)	.58	-.15	.33	.16	.52
いま住む地域の悪口を言われたら、自分の悪口を言われたような気になる	3.00 (± 1.03)	.58	-.01	.27	.09	.32
第2因子：忌避 ($\alpha=.83$)						
地域での活動への誘いは、正直なところ余計なお世話だ	2.50 (± .87)	-.10	.78	-.16	-.10	.74
自分の住む地域で何か問題が起こっても、それにはかかわりを持ちたくない	2.58 (± .83)	-.16	.71	-.20	.10	.59
地域での行事に参加するのはおっくうに感じる	2.84 (± .89)	-.10	.71	-.25	-.01	.57
近所づきあいは面倒なので、なるべくかかわりを持たないようにしている	2.57 (± .88)	-.15	.61	.10	-.17	.43
いま住んでいる地域は、たまたま生活しているに過ぎない	2.70 (± 1.13)	-.05	.55	-.07	-.10	.53
地域での行事や活動は、熱心な人たちに任せておけばよい	2.77 (± .84)	-.48	.52	-.08	.03	.28
第3因子：自治 ($\alpha=.90$)						
いま住む地域をよりよくするための活動ならば、率先して協力したい	2.88 (± .88)	.36	-.19	.76	.15	.85
地域の人々と力を合わせて、地域の育成やまちづくりを進めていきたい	2.91 (± .84)	.39	-.20	.74	.13	.79
地域で生じた生活上の問題は、そこに住む住民が協力し合って解決すべきだ	3.33 (± .86)	.23	-.16	.66	.25	.63
第4因子：規範 ($\alpha=.80$)						
よりよい地域づくりを進めるために決められたルールや規範に従うべきだ	3.94 (± .85)	.16	-.06	.16	.80	.69
いくら個人的なことであっても、地域のルールを無視して好き勝手にすることは望ましくない	3.96 (± .83)	.08	-.10	.15	.71	.64
寄与率(%)		18.74	16.96	12.42	8.46	56.58

表5 因子得点の比較

	社会集団への所属		t-value
	連所属 (n=95)	無所属 (n=124)	
第1因子：共属感情	.09	-.07	1.35
第2因子：忌避	.17	-.13	2.35 *
第3因子：自治	.26	-.20	3.80 ***
第4因子：規範	-.12	.09	-1.71

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

感じているということから第1因子を「共属感情」と、地域での活動に消極的で、かかわりを持ちたくなかったり、おっくうに感じたりし、できる限り地域との関係を遠ざけようとする態度が見られることから第2因子を「忌避」と、地域をよりよくしたいと感じ、それに対して積極的に協力して地域の問題解決やまちづくりを進めようとする意識が見受けられることから第3因子を「自治」と、そして地域で決められたルールや規範は遵守すべきだという共通項が見られるため、第4因子を「規範」とそれぞれ命名した。表5は、抽出された4つの因子の因子得点を連所属と無所属とで比較した結果である。第1因子の共属感情に関しては、阿波踊りの連に所属する人の因子得点の方が無所属の人の得点を若干上回っていた。地域社会へのかかわりを回避しようとする第2因子の「忌避」については、無所属よりも連所属の得点が高く、5%水準で両者に有意な差が見られた。また有意ではなかったものの、第4因子の規範につい

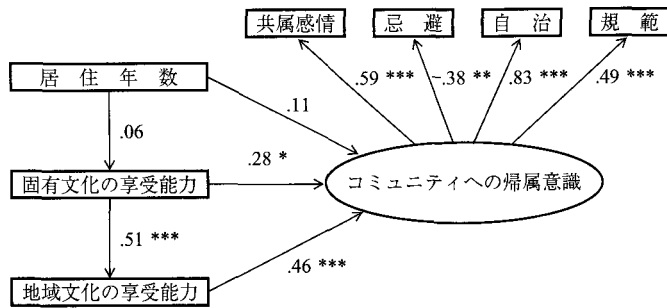
ても連という社会集団に所属し、その集団で規範や役割を実感しているにもかかわらず、無所属の人に比べて連所属の方が規範意識が低い傾向にあった。ただ、第3因子の自治に関しては、連所属の因子得点が無所属を上回っており、0.1%水準で両者には有意な差が認められた。これらの結果から社会集団への所属によって地域内での活動における協同や主体性に対する意識に強く影響を及ぼしているものと推察できる反面、地域でのつきあいをおっくうに感じてもおり、社会集団への所属がコミュニティへの帰属意識に全てプラスに投影されているのではないという様子がうかがえた。

以上のような結果を踏まえた上で、図1の分析枠組みに示したようなコミュニティへの帰属意識に居住年数、地域固有文化の享受能力、地域文化の享受能力がいかなる影響を及ぼすのか検討する。その直接的影響と、地域文化の享受能力を仲介する居住年数と地域固有文化の享受能力の間接的影響を検討するために、各変数の平均値、標準

表6 各変数間の相関・平均値・標準偏差

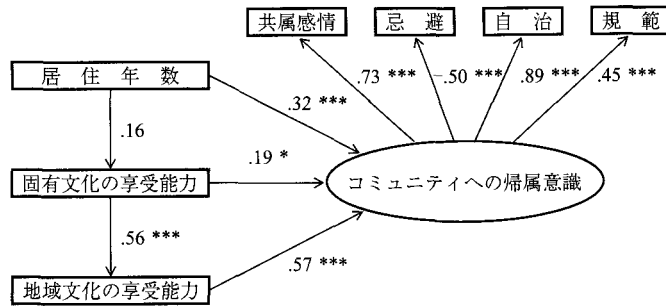
	居住年数	阿波踊り	地域文化	共属感情	忌避	自治	規範
居住年数	—						
阿波踊り	.14*	—					
地域文化	.11**	.58***	—				
共属感情	.33	.36***	.40***	—			
忌避	-.16*	-.01	-.17*	-.42***	—		
自治	.25**	.49***	.62***	.59***	-.36***	—	
規範	.11	.18**	.34***	.28***	-.17**	.36***	—
Mean	15.52	20.81	19.61	17.51	15.97	9.12	7.89
SD	12.47	5.64	3.87	4.30	4.05	2.35	1.53

n=219 *p<.05 ** p<.01 *** p<.001



* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

図2 パス解析の結果（連所属）



* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

図3 パス解析の結果（無所属）

偏差、そして変数間の相関係数を示したものが表6である。「阿波踊り」と「地域文化」と記されるものは、表2と表3に示した6項目の合計得点による合成変数である。享受能力は、「固有価値の理解と継承」という2つの視点からなるが、本研究では獲得された知識や技術の有無・程度では

なく、個人の心的状態を評価する項目を採用したため、2つの視点に相関が示されることが予測されたので、「阿波踊り」と「地域文化」のそれぞれにおいて、単次元による合成変数として享受能力を捉えることにした。両者それぞれの内的一貫性に関しては、信頼係数の α が阿波踊りの享受

能力において.89、地域文化の享受能力においては、「地域文化や郷土芸能の継承はある特定の熱心な人たちに任せておけばよい」という項目の得点を逆転させて α 係数を算出したところ.80と両者ともに高い値が得られた。またコミュニティへの帰属意識については、因子分析の結果から抽出された4因子を構成する下位項目の回答の合計得点による合成変数である。結果に示されるとおり、ほとんどの変数間に有意な相関が見られた。これらの変数を用いて、図1に示した因果モデルの妥当性を共分散構造分析によって検討を試みるが、上記の結果に示されたように、連所属の回答者と無所属の回答者の心的状態には差異が見られ、社会集団への所属が結果に強い影響をもたらす推測されるため、因果モデルの検証はサンプル全体ではなく、連所属と無所属との両者を分けて共分散構造分析を試み、結果を考察することにした。その分析結果を示したものが図2と図3である。四角で囲んだものが観測変数で、楕円で囲んだコミュニティへの帰属意識は潜在変数で、構成概念を示すものである。その結果、図2と図3ともにモデルの適合性が確認された。図2の連所属については $\chi^2=19.98$ ($p=.07$)、図3の無所属については $\chi^2=18.06$ ($p=.11$)で両者ともにモデルは採択され、モデルの適合度指標も連所属ではGFI=.94、CFI=.94、RMSEA=.08、AIC=51.98、IFI=.95、無所属でもGFI=.96、CFI=.98、RMSEA=.06、AIC=50.06、IFI=.98と十分な値が得られた。図2と図3の因果モデルともに、構成概念であるコミュニティへの帰属意識から4因子への各観測変数への影響指数は全て有意であり、構成概念と観測変数は適切に対応しているものと判断した。結果に示されるとおり、地域固有の文化享受能力から地域文化の享受能力、地域文化の享受能力からコミュニティへの帰属意識、また地域固有の文化享受能力からコミュニティへの帰属意識のパス係数は、いずれも予測に一致した有意な値が得られた。中でもコミュニティへの帰属意識に対する説明力は、地域文化の享受能力であるということが明らかになった。また無所属の因果モデルに関しては、居住年数からコミュニティへの帰属意識についてのパス係数も有意であった。つまり、無所属の群に関しては、居住年数が長くなるほど、コミュニ

ティへの帰属意識が高まることが明らかになった。ただ言い換えれば、連に所属する人々の方がより一層、その地域に長く居住するかどうかということよりも、その地域で文化とどうかかわったのかが、コミュニティへの帰属意識に強く影響するということが理解できる。連所属、無所属ともに居住年数から地域固有の文化享受能力に向かうパス係数は有意ではなかったが、それは、地域固有の文化に対する理解を深め、価値を評価することには、量的、すなわち時間的な問題よりもその文化や存在を認識するために郷土芸能そのものかどうかとどう対峙するかという質的な側面が重要である、上述の結果を裏付けていることを示すものといえるだろう。

4. ディスカッション

「街づくり」という言葉は、1962年の名古屋市栄東地区の都市再開発の市民運動において初めて使われ、その後、一般用語として登場したのは、1970年代前半に区画整理による道路拡張やマンション建設にともなう日照権の侵害等への反対運動が起こったときといわれている⁴⁾。1970年代後半になると、大都市圏でインナーシティ問題が深刻になり、それに対して地域社会を再生するまちづくりが防災とも絡みながら行政と地域住民の協働で進められ、まちづくり協議会などで住民自らが主体的に計画づくりにかわり、時間をかけて道路や公園の整備を始め、産業政策、福祉、教育問題などと関係しながら生活基盤を向上させるまちづくりが進められた¹⁸⁾。この時期に「まちづくりとは何か？」ということについて、行政関係者だけでなく、建築家や福祉の専門家、また生活環境や都市問題に関心を寄せる様々な学問分野の研究者達がまちづくりという言葉に鍵概念にし、学際的かつ総合的に都市問題にアプローチし始めたのである。ひらがなで表記する「まちづくり」は、官庁用語として使われ、硬直した基準によって定められる機械的な作業といった固いイメージを持つ都市計画とは違い、衰退しつつある地域の再生をめざして、住民自らが地域をつくりかえようと物的環境の改善のみならず、目に見えない生活面での改善や生活の質の向上を図るための活動の総称として使われるようになった。

現在、まちづくりという名で取り組まれる活動は、都市開発や再開発、区画整理から快適な住環境の整備や住まいづくり、またコミュニティデザインを含めた都市計画や地方都市で衰退しつつある商店街などの商業地の活性化、さらには地域で特徴的な事業を展開するまちおこし事業や地域社会と行政との連携を図るパートナーシップに至るまで多岐に渡っている。その中でもまちづくりと文化の関係に関心が寄せられるようになって久しい。1980年代後半には、多くの地方自治体において、好景気の煽りも受け、地域文化の受け皿として美術館や音楽ホールといった文化施設が建設されたが、いわゆる「箱物行政」という公共事業の色彩が色濃く映った。施設建設などのハードの整備は目に見えるため、文化行政の象徴としてわかりやすいという面がある。しかしながら、そのような文化行政や都市計画において、箱物ありきの行政論理が優先されてしまったために、作り上げられた建物や計画にはその地域で生活を営み活動する住民の存在や姿が反映されていないという結果を招いてしまった。さらにこれまでの文化事業については、展覧会やサミットといったイベント的なものが主流であり、総花的であったり、打ち上げ花火的であったりしたため、事業に継続性や一貫性、また連動性が加味されず、起爆剤のような存在でしかなかった。まちづくりには、そのまちのために興される「全てのアクション（行為）を含む公共的営為」²⁵⁾ という意味合いが込められるため、まちづくりそのものやまちづくりにかわる事業は、そのまちに住む人々の存在や住民自身の主体的かつ創造的な活動、また生活との密接なかかわりが論じられなければ、まちづくりという言葉が一人歩きし、いつまで経っても地域振興における美辞麗句にしかならず、まちづくりそのものも机上の空論化してしまいかねない。

本研究が掲げた命題は、地域文化の振興とコミュニティ意識の醸成を住民サイドの視点から捉え、地域住民の祭りや郷土芸能といった地域固有の文化に対する享受能力が地域文化の価値の認識や理解を促し、それがコミュニティへの帰属意識の高揚に帰結するという因果モデルを検証することであった。ケースに取り上げた阿波踊りは、一部の伝承者だけに受け継がれるような限定的な伝

統文化ではなく、現代社会における「職・遊・学・憩」という地域性も反映した郷土芸能として広く大衆に受け入れられている文化であり、吉野が主張する「全てのアクションを含む公共的営為」というまちづくりに対する意味合いをくみ取れば、県民と文化の接点は他の祭りや郷土芸能と比べても比較的近い存在に位置づくものであるといえる。結果に示されたように、地域文化にかかわる社会集団への所属は、地域固有の文化に対する享受能力を高める一方で、その行動や意識は地域文化全般的な享受能力にも投影されることが明らかになった。また社会集団への所属は、コミュニティへの帰属意識を構成する自治という要因にもポジティブに影響していることもわかった。さらに社会集団への所属とは関係なく、地域固有の文化享受能力が地域文化全般の享受能力に影響し、最終的にコミュニティへの帰属意識にも強く影響を及ぼすという因果関係も証明された。つまり、祭りや郷土芸能のような地域固有の文化は、その文化の存在が地域住民にとって身近な存在であればあるほど、またその文化固有の価値を認識し、理解する享受能力が高ければ高いほど、コミュニティへの帰属意識が高まるということである。

Schultzら¹⁹⁾は、「シンボリック解釈的アプローチ」という手法を用いて、組織イメージと組織アイデンティティ、そして組織文化との緊密な関係性を「表出的組織」という概念を用いて論じている。その重要な要素である「感情的でシンボリックな表出性」は、単に組織外部のオーディエンスに向けられたものだけではなく、組織成員などの組織内部のオーディエンスに向けられたものでもあり、企業戦略や企業イメージ、また名声といった企業のコーポレート・アイデンティティを築き上げるために行われる活動は、組織の表出性を活用した典型的な例といえるだろう²³⁾。そのように考えれば、阿波踊りは、徳島という地域のアイデンティティを示すためのシンボリックな存在であり、阿波踊りは連に所属するメンバーだけでなく、踊り場の空間を演出する人、またそのパフォーマンスを観て拍手や喝采を送る人、さらにはその踊りに祝儀を贈ったり、踊り子の労をねぎらい、飲食などを振る舞ったりする人を含めた数多くの人々によって阿波踊りは生産され、消費されるの

である。阿波踊りにおける「同じ阿呆ならおどらにゃ損々」という有名なフレーズは、場を共有する人たちの共属感情をかき立てる様相を示すものであり、広く人々に開かれた空間づくりと演出がさらに人々の気分を高揚させ、初めて徳島の地に足を踏み入れた人までもが踊りの輪と渦へと巻き込まれていくのである。また Hatch and Schultz⁵⁾ は、組織アイデンティティ・ダイナミクスモデルを提示し、組織内部の成員が分有するところの組織文化と組織外部のオーディエンスが解釈するところの組織イメージとが、ダイナミックに交錯するところに組織アイデンティティは構築されると述べている。つまり、徳島県外の人々が阿波踊りに対して期待を抱き、徳島県のイメージを形成するように、徳島県民は有名連に対して「これぞ阿波踊り」というものを期待し、徳島内外の人々、また有名連の内外の人々がダイナミックに交錯することによって徳島のアイデンティティが構築される。そして阿波踊りという地域文化に触れ、人々がそれを享受し、徳島県外の人々は徳島に対するイメージを、そして徳島県民は阿波踊りをより身近に感じることによって徳島に対するアイデンティティを再形成するのである。

コーエンとプルサック²⁾ は、ソーシャル・キャピタルは人々の中の積極的なつながりの蓄積によって構成されるものであり、「高い信頼」「強固な社交ネットワーク」「活気のあるコミュニティ」「共通の理解」「共同の取り組みに対する対等な参加」がその特徴的な要素であると述べている。本研究の結果から文化が人と地域を繋ぐ連結ピンや共通の言語となり、する・みる・支えるにかかわらず、文化への関与と固有価値の認識と理解が自らが住む地域への理解にも繋がるということが明らかになった。つまり、地域文化の振興が地域住民間のつながり、ソーシャル・キャピタルの醸成や蓄積に寄与すると考えることができるだろう。また同時に、アイデンティティの表出性から考えても地域文化の振興は、まちづくりの有効なツールとなりうることも示唆された。重森²⁰⁾ は、地域文化の発展に重要な視点として、①自治の原則、②自立の原則、③共同の原則、④人間発達の原則という4つの原則を掲げ、内発的地域発展の論理を展開しているが、醸成されたコミュニティへの帰属

意識や地域に蓄積されるソーシャル・キャピタルが、地域内での異なる活動やさらなるまちづくりにもどのように転用できるのか、また目に見えないこれら地域の資産ともいえるものを行政組織のみならず、民間企業、NPOをはじめとした中間組織がどのように活用し、事業化するのかという戦略的まちづくりの展開に対する議論が今後求められるだろう。

引用文献

- 1) Bowles, S. and Gintis, H.: Social capital and community governance, *Economic Journal* 112: F419-F436, 2002.
- 2) コーエン, D. ・プルサック, L. (沢崎冬日訳): 人と人の「つながり」に投資する企業, ダイヤモンド社, 東京, 2003.
- 3) Coleman, J.S.: *Foundations of social theory*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1990
- 4) 延藤安弘: まちづくり読本, 晶文社, 東京, 1996.
- 5) Hatch, M.J. and Schultz, M.: The dynamics of organizational identity, *Human Relations*, 55 (8) : 989-1018, 2002.
- 6) 池上惇: 生活の芸術化: ラスキン・モリスと現代, 丸善ライブラリー, 東京, 1993.
- 7) 池上惇: 情報社会の文化経済学, 丸善ライブラリー, 東京, 1996.
- 8) 菊池美代志: コミュニティづくりの展開に関する考察—社会学の領域から, (コミュニティ政策学・研究フォーラム編「コミュニティ政策1」, 東信堂, 東京), 33-44, 2003.
- 9) マッキーバー, R. M. (中久郎・松本通晴監訳): コミュニティ, ミネルヴァ書房, 京都, 1975.
- 10) 中村久子, 新聞記事に見る戦後の阿波踊り—戦後の阿波踊りを支えたもの, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 1: 1-11, 1993.
- 11) 中村久子: 阿波踊り起源説について, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 4: 23-36, 1996.
- 12) 岡本包治編著: まちづくりと文化・芸術の振興, ぎょうせい, 東京, 1992.
- 13) 奥田道大: 都市コミュニティの理論, 東京大学出版会, 東京, 1983.
- 14) 奥田道大: 都市型社会のコミュニティ, 勁草

- 書房，東京，1993.
- 15) パットナム, R.D. (河田潤一訳)：哲学する民主主義，NTT出版，東京，2001.
- 16) パットナム, R.D.：ひとりでボウリングをするーアメリカにおけるソーシャル・キャピタルの減退，(宮川公男・大守隆編「ソーシャル・キャピタル」，東洋経済新報社，東京)，55-76, 2004.
- 17) ラスキン, J. (木村正身訳)：ムネラ・プルウエリスー政治経済要義論，関書院，東京，1958.
- 18) 佐藤滋：まちづくりの科学，鹿島出版会，東京，1999.
- 19) Schultz, M., Hatch, M.J. and Larsen, M.H.: The expressive organization, Oxford University Press Inc., New York, 2000.
- 20) 重森暁：現代地方自治の財政理論，有斐閣，東京，1988.
- 21) 鈴木広編：コミュニティ・モラルと社会移動の研究，アカデミア出版会，東京，1978.
- 22) 高橋晋一：「連」のエスノグラフィーー阿波踊りの文化人類学的研究に向けて，徳島大学総合科学部人間社会文化研究, 7: 27-42, 2002.
- 23) 竹中克久：組織戦略を社会的見地から検討するー認知的・道具的合理性から理解可能性へ，社会学評論, 56 (4) : 780-796, 2006.
- 24) テンニース, F. (杉之原寿一訳)：ゲマインシャフトとゲゼルシャフト，岩波文庫，東京，1957.
- 25) 吉野正治：市民のためのまちづくり入門，学芸出版，東京，1997.

(受付：2007年1月22日)
(受理：2007年7月9日)